

ルカによる福音書2章1-20節 「三つの新しい時代」

1A 世の苛酷さ 1-7

1B 神の子、救い主を豪語する独裁者 1-5

2B 宿なしの飼葉おけ出産 6-7

2A 御使いの伝える喜びの知らせ 8-14

1B キリストこそが主 8-12

2B 地の上にある平和 13-14

3A 良き知らせの伝達 15-20

1B 捜し当てた羊飼 15-17

2B 心に留めたマリア 18-20

本文

今朝は、ルカによる福音書2章 1-20 節に注目したいと思います。クリスマスとは、Christ Masつまり、「キリストのミサ」ということで、キリストを礼拝することを意味しています。聖書には、イエスが生まれた時に、そこに来た人たちが、その赤ん坊、また幼子のイエスを拝みに来た人たちの記録が二つあります。赤ん坊については、羊飼いが御使いたちのところにやって来ました。そして二歳になる前の幼子の時に、東方からの博士が来て、イエス様にひれ伏し、礼拝を捧げました。それで、クリスマス、すなわち「キリスト礼拝」と名づけられました。

ところで、間もなく令和元年も終わりに近づいています。私たちキリスト教会にとって、上皇陛下のお誕生日がとても尊く思われました、12月23日がいつも休日だったので！23日の休日がなくなっただけはちょっと寂しいですが、今年は日本国民が少し和やかになれたのではないかと思います。災害が続いたり、事件が多かったり、社会情勢も不穏で、また自分の身の回りにもいろいろな大変なことがあったかもしれません。けれども、無事に数々の、新しい天皇の即位に関わる儀式が終わり、その時に、一時でも平和な思いになることができたのではないのでしょうか？それは、そこには平和の祈りが込められていること。また新しい王が即位することによって、次の新しい時代への希望や期待があること。また赦しもありますね。天皇の代替わりの時には、多くの特赦が実際に出るようです。そして、世界から多くの指導者や要人たちが即位式に参加しました。

このように、新しく王が即位されることは、その即位にある栄光や誉れ、そして平和や希望がもたらされることとなります。しかし、人間の歴史を大きく見ますと、最も影響力をもたらした国といえば、ローマでしょう。ローマ帝国は、その初めの皇帝アウグストゥスが即位した紀元前27年から始まります。395年に東西に分裂しますが、476年まで西ローマが、1453年までビザンティン帝国、東ローマ帝国が続きました。その支配は、実に地中海周囲にある世界全体です。南は北アフリカ、そして東は小アジア、シリア、メソポタミア、西はスペインやイギリスなど、ヨーロッパの大半を含ん

でいました。人類の歴史の中で、千年以上の長期に渡り、広範囲の帝国は現れませんでした。

その初代皇帝が、これから登場します、一節にあります。「1 そのころ、全世界の住民登録をせよという勅令が、皇帝アウグストゥスから出た。」とありますね。ローマが帝政になってからは、もはや外国勢力との戦いはなくなり、平和が確立しました。「パクス・ロマーナ」と呼ばれます。ですから、ついに世界に平和が来たのだ、これで人々は平穏に暮らし、しかも豊かに暮らすことができるのだ。このような救いと勝利をもたらした皇帝は、まるで救い主のようなお方だ、ということになるのです。事実、彼は「救い主(ソーテリア)」と呼ばれ、平和の君とも呼ばれ、そして彼が生まれたのは、神からの子であるとして、彼が神のように祭り上げられました。そして、このような新しい時代に入ったことを、ユーアンゲリオン(良き知らせ)福音と言ったのです。

このように、日本における新しい時代よりも、はるかに大規模にかつてローマでは新しい時代の幕開けがありました。けれども、人間の歴史を見れば、このアウグストゥスが小物になってしまうほどの大きな出来事が、ローマ帝国が始まってから間もなくして起こりました。そうです、イエス・キリストの誕生です。この新しい時代の幕開け、神の国の始まりを意味しています。今は、2019年です。誰を境にしているか、お分かりですね？イエス・キリストの誕生です。実際は少しずれてしまっていますが、しかし、人間の歴史の中で、このイエスという人物によって変えられた人は、世界中でこの方以外にいません、比べようがありません。アウグストゥスの名は知られていますか？彼によって、人生を変えられ、影響を受けた人はいますか？彼は本当に救い主だったのでしょうか？彼は、権力や武力をもって世界に平和をもたらしたかもしれませんが、イエスは、人々の心に寄り添い、へりくだり、心の奥底から変えてくださる方です。

ですから、三つの新しい時代です。今年迎えた令和の時代がありました。そして世界の歴史の中での超大国、ローマの幕開けです。そして何よりも、今にまで至る、そしてたった今、みなさんにも与えられる、まことの良き知らせ、イエス・キリストの福音の時代があります。

1A 世の苛酷さ 1-7

もう一度、本文を読んでみます、まず 1-5 節です。

1B 神の子、救い主を豪語する独裁者 1-5

1 そのころ、全世界の住民登録をせよという勅令が、皇帝アウグストゥスから出た。2 これは、キリニウスがシリアの総督であったときの、最初の住民登録であった。3 人々はみな登録のために、それぞれ自分の町に帰って行った。4 ヨセフも、ダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。5 身重になっていた、いいなずけの妻マリアとともに登録するためであった。

ローマにおける平和は、あくまでも力による平和です。その遺跡を見れば、いかにそこが繁栄していたかを見ることができますが、ほとんどが奴隷によって成り立っていて、自由人は富と快樂に

浸っていました。平和と言えども、強権と高い納税がありました。この「全世界の住民登録」にもそれが表れています。紀元前 6 年から 4 年の間の出来事と思われます。これは統治者が自らの臣民がどれだけいるかを誇るために行うものですが、自分の所有物を数えるように、住民登録をさせるのです。その時に文句は言えません。仕事をしていようが休まないといけない、妊娠して臨月になっても、長い距離を動かないといけないのです。

それに対して、ヨセフという人がいました。彼は、かつての古代イスラエル王国のダビデの末裔でした。徳川家の末裔みたいにいえばよいでしょうか？今、その子孫の方々何をしているか？私たちは分かりませんね？今となっては何の意味もないような家系を、ヨセフは持っていました。ダビデは、ユダヤのベツレヘム出身でしたが、ヨセフの家庭はガリラヤ地方のナザレに住んでいます。ナザレからベツレヘムまでは直線距離でも百^キ以上あります。南下していく時、ヨルダン川沿いに歩いて迂回しますから、実際はもっと遠かったことでしょう。当時は驢馬あるいは騾馬です。聖霊によってイエス様を身ごもったマリアは妊娠して、臨月になっていました。けれども、今話しましたように、選択肢はないのです。行くしかありませんでした。

2B 宿なしの飼葉おけ出産 6-7

6 ところが、彼らがそこにいる間に、マリアは月が満ちて、7 男子の初子を産んだ。そして、その子を布にくるんで飼葉桶に寝かせた。宿屋には彼らのいる場所がなかったからである。

二人はベツレヘムに着きました。けれども、その時に彼女は陣痛が始まり、出産間近となつてしまいました。ベツレヘムの町には、同じように住民登録のために移動してきた人々でごったがえしています。宿という宿が客でいっぱいになっています。そこでようやく、マリアに出産させることができる場所は、なんと家畜の寝泊まりしていたところですよ！このようにして、ヨセフとマリアは、皇帝による身勝手な住民登録で大変な不便を強いられただけでなく、雑踏の中で非常に苦しんでいるのに、だれも彼らを手助けしてあげることがなかった、疎外されていたのです。私たちの社会に似ているのではないのでしょうか？

しかし、聖書の与える希望は、こうした生きづらさを超えたところにあります。イエス様は「飼葉桶」に寝かされています。ベツレヘムに行けばよく分かりますが、そこにはたくさんの洞窟があります。イスラエルでは、貧しい人々は洞穴を家にしていました。そして、家畜をその洞窟の奥で飼っていました。その奥のところに寝かせてもらっていたら、マリアが産気づいたので、男の人たちにはどいてもらって、そこで生まれたのでしょうか。

ところで、洞窟というのは、イスラエルには岩が本当に多いので、いろいろな事に使われていました。家屋にも使われましたが、もう一つは埋葬にも使われていました。ユダヤ教では遺体は死んだその人のうちに埋葬することになっています。すぐに死体をくるまう布が必要なので、万が一に備えて洞窟にそのような布を置いておくのです。そして洞窟には、骨壺がよく置いてありました。日

本の骨壺とは違って、四角い宝物入れのような箱の形をしています。それを飼葉桶として藁をそこに入れて使うことの十分に可能です。ですから、ここでイエス様が、飼葉桶の中で布にくるまれて寝ているお姿は、当時の人たちにとっては、「まるで埋葬しているかのようだ」と連想する人もいたかもしれません。赤ん坊が、すでに遺体の埋葬のために使われるものと同じ格好で寝かされていたのです。イスラエル人の考古学者は、こう言っていました。「イエスは、生まれた時点で、死のイメージがあった。生まれた時に、死の運命を帯びていた。」

イエスは、ご自分が来たのは命を与えるためなのだということを語られました。「マル 10:45 人の子も、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのです。」贖いの代価とは、身代わりのことです。しかも、罪を犯した者の身代わりになって、その刑罰を自分のいのちを差し出すことによって受けることです。主は、成人してから、ローマが、反逆者に対して使う極刑、十字架刑の処せられて死なれました。そして、洞窟に掘られた墓に埋葬されたのです。これが、キリストが世に来られた目的です。それぞれの者が神に対して犯した罪が赦されるために死なれました。

今、「生きづらさ」について話しましたが、ローマ社会は華やかなように見えて、こういった苛酷さがありました。今の社会も華やかなように見えて苛酷ですね。虚しさがある、また落ち込みがあります。日本以上にクリスマス祝うアメリカでは、なんとクリスマスの時期に自殺率が高くなるそうです。一見、幸せそうに見えるから、実はその孤独感はさらに強烈に抱くのでしょう。というのは、人間の根源に罪があるからです。本来、人間が人間として生きるべき指針を見失っているところにある罪です。すべては神によって造られたのに、その天地を造られた創造主に目を向けることをせず、自分は自分で生きていると思っています。これが、「生きづらく」させている、最も大きな原因です。これだけ便利で、平和な社会にあっても、虚しくなり、孤独になり、生きている意味が分からないという矛盾が起こるのです。

しかし神は、私たちを愛して、その根源的な罪、神を神としていない罪を取り除くために、自らの独り子を人として生まれさせ、そしてローマの十字架にかかるようにされました。これまで犯した罪が赦され、自分を造られた神ご自身に戻ることができるようにされました。

2A 御使いの伝える喜びの知らせ 8-14

1B キリストこそが主 8-12

8 さて、その地方で、羊飼いたちが野宿をしながら、羊の群れの夜番をしていた。

場面が一気に、ベツレヘムの郊外にある丘に移っています。羊飼いたちが羊の群れを飼うことができる丘が、その町の周辺にありました。いや、今でもあります。今でもベツレヘムの町を少し離れると、羊飼いの姿を見ることができます。パレスチナ・アラブ人の子供たちが、羊を飼っている姿を私も見かけました。羊飼いという仕事は、社会的には底辺の仕事です。当時も同じで、羊飼い

は社会から卑しめられていました。

けれども、ベツレヘムでは、神殿の犠牲のいけにえのための羊を育てている、大事な働きをしていました。言うならば、空港で海外旅行に行く華やかな姿とは裏腹に、荷物をしかるべく飛行機の中に入れて行く従業員のようなものかもしれません。あるいは、華やかなディナーの会場の裏で、ゴミ収集で働いている人々かもしれません。どれだけ私たちは敬意を払っているか？と言えば、していませんね。大事なのに、人々はないがしろにします。しかし、そういった死角に対して、神は大いなる栄光をもって人に臨まれるのです。

9 すると、主の使いが彼らのところに来て、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。
10 御使いは彼らに言った。「恐れることはありません。見なさい。私は、この民全体に与えられる、大きな喜びを告げ知らせます。11 今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。12 あなたがたは、布にくるまって飼葉桶に寝ているみどりごを見つけます。それが、あなたがたのためのしるしです。」

天使がやって来ました。羊飼いは恐れていますが、イスラエルの民に対して大いなる喜びがあることを告げにきたと言います。それが、「ダビデの町で、救い主がお生まれになった」ということです。そしてその方こそが、主であるキリストだということです。それが誰だかを分からせるために、飼葉桶に布にくるまって寝ている、みどりごだということです。

イエス様には、いろいろな呼び名が与えられています。「救い主」ということ。また「主」とも呼ばれています。他の箇所では、「神の子」とも呼ばれます。先ほど話したように、これらが全て、皇帝に対して使っていた呼び名だったのです。しかし今、天使たちは、この布にくるまれた、飼葉桶に寝ておられるイエスこそが、ユダヤ人の待ち望んでいたキリスト、救い主であるだけでなく、全世界の救い主、王、神の子であると宣言しているのです。そして、この方に、新しい時代が来たという良き知らせがあるというのです。そして、地上には皇帝の栄光がありますが、しかしイエスの栄光は、天からの栄光、神の栄光だということです。

そして、もう一つ、神の裏技とも言うべきご計画がありました。アウグストゥスは自分の欲望に任せて住民登録をせよという勅令を出しました。このような理不尽なことに対して、私たちの心へしなえますね？仕事をして、いろんなところで不条理なことは起こります。けれども、全てが神の御手の中にあります。アウグストゥスが自分は何でもできると思っていたでしょうが、その彼を神ご自身は将棋の駒のようにして使っておられたのです。ミカという預言者が、このことの 800 年ぐらい前に、預言をしていました。「5:2 ベツレヘム・エフラテよ、あなたはユダの氏族の中で、あまりにも小さい。だが、あなたからわたしのためにイスラエルを治める者が出る。その出現は昔から、永遠の昔から定まっている。」ベツレヘムで、キリストが生まれることを前もって予告していたのです。ヨセフの家族はナザレにいましたから、この住民登録によって否が応でもベツレヘムに動かざるを

得ませんでした。しかも、マリアの臨月が近づいている時に勅令が出たのです。この不便は、実はイエスが確かにキリストであることの預言の成就だったのです。

2B 地の上にある平和 13-14

13 すると突然、その御使いと一緒におびたしい数の天の軍勢が現れて、神を賛美した。14 「いと高き所で、栄光が神にあるように。地の上で、平和がみこころにかなう人々にあるように。」

御使いが大勢来ました。そして神を賛美しました。私たちが歌いましたが、無数の天使たちが天で神を賛美したのです。その内容が、天において、神の御座があるところで、栄光があるようにというものです。地上では、皇帝への賛美がローマ中で捧げられていましたが、時を超えて、場所を問わず、キリストの名が賛美されているのは、天における栄光だからです。

それから、地の上では平和が神の喜ばれる人々に与えられるようにということです。これは、外側の平和のことではありません。パクス・ロマーナは、確かに表向きは平和ですが、内実は人々を抑圧していました。偽りの平和、平穏と言ったらよいでしょうか？ここでの平和は、心の中の平和です。神の喜ばれるところにいる人々に与えられている平安です。どんな暗き世においても、決して消えて行くことのない光が与えられているので、希望を捨てないでいることができる平安です。

3A 良き知らせの伝達 15-20

1B 捜し当てた羊飼い 15-17

15 御使いたちが彼らから離れて天に帰ったとき、羊飼いたちは話し合った。「さあ、ベツレヘムまで行って、主が私たちに知らせてくださったこの出来事を見届けて来よう。」16 そして急いで行って、マリアとヨセフと、飼葉桶に寝ているみどりごを捜し当てた。17 それを目にして羊飼いたちは、この幼子について自分たちに告げられたことを知らせた。

羊飼いたちが見た者は、ユダヤ人たちが待ちに待った、キリストが来られたというもの。こんなすごい知らせはないということで、興奮しながらベツレヘムの中に入っていく、飼葉桶で寝ている嬰兒を捜しに行きました。そして、捜し当てると、そのことを興奮しながら御使いから告げられたことを話したことでしょう。

人というのは、良い知らせを持つとこのようになりますね。これはとても活きている姿です。だれでも、何か良い知らせがあれば、誰から頼まれることなく話すものです。人には、良い知らせがあつてこそ、自分が生きていけると実感できるのだと思います。そして、私たちキリスト者には、羊飼いと同一良い知らせを持っています。それが、救い主である方が私たちのところに来てくださった！という感動です。

2B 心に留めたマリア 18-20

18 聞いた人たちはみな、羊飼いたちが話したことに驚いた。19 しかしマリアは、これらのことをすべて心に納めて、思いを巡らしていた。20 羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて御使いの話のとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。

みなが驚いています。これまで聞いたことのないようなことを聞いたからです。目にしたことないことを見て、思いつきもしなかったことを知るからです。前代未聞のことです。

けれども、多くの人はそういった前例のないことは、無かったことにするか、拒んでしまいます。あまりにも非日常的であり、そこに自分の身を投じることはためらってしまうからです。私は、信仰を持ったのは、実は 30 年前の今頃でした。落ち込んでいました。クリスマスの礼拝に出て、それから家に帰って、独り自分の部屋にいました。これまでのことを悔いて、それで神のことを思い出しました。「これまであなたを無視して生きていました、ごめんなさい。」と祈りました。すると、信じられないことに、頭のとっぺんからつま先まで、こんな惨めな醜い自分を受け入れている神がおられることを知りました。その愛に打たれて、涙を流して「ありがとうございます」と祈りました。けれども、自分は両親は普通の、仏教や神道の人です。キリスト教とは全く無縁でした。ですから、クリスマスチャンとして生きるのは、清水の舞台から飛び降りる思いでした。それは、ただ感動するだけでなく、よく考えて、それで自分の生活、人生をこの方に任せる決断をしたからです。

それが今、ここでマリアが行なっていることです。「しかしマリアは、これらのことをすべて心に納めて、思いを巡らしていた。」思い巡らすというのは、全く理解できないことが起こっても、それで感情的に拒むのではなく、よく考えて、どういふことかを咀嚼するのです。そして時が来たら、ああ、そういうことだったのか！と悟ります。みなさんにも、そういう時をもってほしいのです。今のクリスマスの話は、初めて聞いたかもしれません。そしてそれなりに、心打つものがあったかもしれません。けれども、驚くだけでなく、思い巡らしてほしいのです。

そして、この羊飼いは、喜びに満たされました。神をあがめています。なぜ、そのように充実したのでしょうか？それは、そこにキリストがおられるということを体験したからです。世の中では、いろいろ、どうしようもないことがあります。ローマ社会のように、平和なようであり、酷い目に遭うことがあります。また、宿屋から締め出されるような疎外感を感じるかもしれません。人々が幸せそうに見える時に、寂しくなるかもしれません。心が満たされないと感じます。その時に必要なのは、何かをすることではなく、誰といっしょにいるか？であります。イエスが生まれた時、この方はインマヌエルと呼ばれました。「神がともにおられる」ということです。この赤ん坊のイエス様を見て、羊飼いが大いに喜びましたが、神が共におられるということを知りさえすれば、自分に神がおられる、主イエスがおられることを知りさえすれば、これまでがき苦しんでいた心は、完全に満たされ、全き平安を得られます。